

大曲 (たいきょく) の美

舞楽の大曲は、組曲で構成される平舞で、全編のいわゆる「一具」上演が、最高格式です。鳥の姿をした舞人は、特別な兜に、上着の「袍」が両袖（諸）肩担ぎで、音楽も、曲ごとの拍子に変化する管楽の調べに、絃楽が加わる「管絃舞楽」が特徴です。

演奏と演舞には、相当な力量に加えて人員と時間が必要なことから、本格上演も稀で途絶えたものも多く、古代から楽人の夢や憧れであり続けながら、伝承されてきました。

現代では、左方『蘇合香』『萬寿楽』『春鶯囀』『甘州』と右方『新鳥蘇』『古鳥蘇』『進走禿』『退走禿』の各4曲が伝承をもとに復興されています。写真は、当会公演のうち、数少ない正面からの本格記録です。

左方 蘇合香



右方 新鳥蘇



左方 萬寿楽



右方 古鳥蘇



当会では、定演実績をもとに平成 22 (2010) 年の「春鶯囀」初演以降、明治選定譜の全曲定期上演を目標にして、資料を現代版に再構成して、年間計画で稽古を重ねました。

先例をもとに一度に困難なものは、2回目で、ようやく実現しました。特に『蘇合香』は、平成 27 (2015) 年に前半部分を試演して、平成 30 (2018) 年に一具が完成しました。完成ごとに、翌年の東京定演においても3年連続で広く公開 (『萬寿楽』2018年、『蘇合香』2019年、『春鶯囀』2020年) しています。

<左方>

○春鶯囀 (2020・2016・2013・2010年)



唐代に春の鶯うぐいす さえずが囀る姿を舞曲にした。遊声・序・颯踏・入破・鳥声・急声ゆうせい じよ さつとう じゆほ てのしやう きっしやうで構成される。

○蘇合香 (2019・2018・2015年)



序(一・三・四・五帖)・破・急の全編上演で1時間半程度。インドのアショーカ王が病に倒れた時に、蘇合香という薬草で全快した故事に由来。薬草を菖蒲文様にした兜が特徴。

○萬秋楽 (萬寿楽/2018・2017年)



序・破(一・五・六帖)で構成、仏教由来の舞で、兜は3つの光と桐・竹・唐草の文様。

○甘州 (2017・2012年)



日本の弥栄と豊作を祈る「神州」。竹から鳥が毒虫を追い払う唐代の由来がある。

<右方>

いずれの舞も四人又は六人で前半の舞を終えて後、後半は、前の二人が桴を持ち軽快に座して首振り、岐呂利（手を捻る所作）など、後参舞を舞います。写真は、後ろの2人が前の2人に桴を渡す場面。



○新鳥蘇（2018・2017年）



鳥蘇利地方（渤海国）の民族舞踏が起源とされ、「納序」「古弾」の前奏曲の後、曲が始まる。前半は、序吹後、間・侍拍子という延拍節、二辺後、三辺の繰返しと変化に富む曲調。

○古鳥蘇（2013年）



起源は「新鳥蘇」に同じ。前半は、中間で向合い後、反対に渡り背合せ（左写真）にて舞う。

○進走禿（2020年予定）／○退走禿（2018年）



進走禿の「若舞（赤面）」に対して、退走禿は「老舞（白面）」とされ、前半は反対に岐呂利（右写真）で渡り後に敷手、戻り後に左右に振り飛ぶ舞が特徴。